

# 第26回東京ヴォーカルアンサンブルコンテストを聴いて

31期 森田直博

大きな規模の合唱団が指揮者の技量によってその演奏の良し悪しが決まるのに対して、少人数コーラスはメンバー個人の技量や互いのコミュニケーションが必要だ。駿河台倶楽部が「勉強のために」と初めてこのコンテストに参加したのは2年前の第24回。以来3回連続で一般男声部門での出場となる。毎回コンテストの規定ギリギリ一杯の20名のチームと、10名程度の少人数チームの2チーム出場し、後者の少人数チームが「銀賞」、昨年は「金賞」を受賞し、今回も見事「銀賞」を受賞した。また、明治大学グリークラブ関係では「Be-ieve Equipe」が見事「金賞」を、現役の「めいぐりー」(明治大学グリークラブ)が銅賞を受賞した。

大会4日目の一般男声部門口団体の全てを北とびあさくらホールの客席で聴いた。

「少人数アンサンブルは均質性がキモ」

一人一人の音程、音色、フレージングが揃わないと上手く聞えない。つまり飛びぬけて上手い人がいなくても良い。

「デュオナミック以外でどれだけ勝負できるか」

大合唱団と違いタイナミックレンジに境界がある。テンポ、表現、色彩感などで曲ごとに変化をつけないと聴き手に飽きられてしまう。

「長年一緒にやっている団体は強い」

少人数は隣で歌っているメンバーの声、クセなどを知った上で、時には隣の人とトーンを合わせたり、自分がリードしたり「あうん」の呼吸が必要。歌う技術と同じくらい「聴く技術」が求められる。

では印象に残った団体について、お世辞抜きで感じたままを書きます。失礼はご容赦を。

「めいぐりー」(明治大学グリークラブ)

1曲目の「祝福」は出だしからトーンがとても揃っていて、修道院でグレゴリア聖歌を聴いているよう。ヴィブラートを抑えたい発声はこういったアンサンブルには有効で、ハーモニーは及第点。最終の転調も綺麗にハマり、ちゃんと周囲が聴けていると感じた。2曲目の「カウボーイ・ポップ」は彼等の年代に個性がヒタリと合っていて、歌う側が共感しているのが良く分かる。1曲目との対比をつけ、もう少しリズムの切れが良かったら更に上が狙えたかも。もっと胸を張って歌って欲しいとも思った。

「駿河台倶楽部」

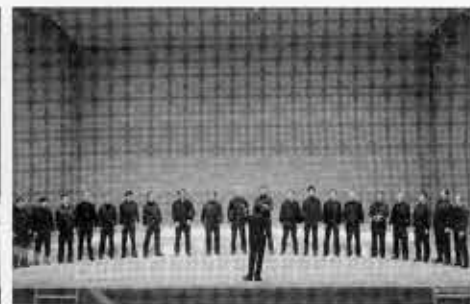
北橋さんの指揮で「草野心平の詩から」より「石家荘にて」「天」「雨」の3曲。11回演奏会の前哨戦としての意味合いもある。「石家荘」は緊張もあって苦戦。まず、声が沈んで音程が下ががる。ポリフォニーなのに縦が揃わない。ベースが鳴って欲しいところで鳴らない。「天」でも欲しい音量が出ない。そんな中で「雨」は正に期待通り！と言った演奏。間瀬さんのソロは流石で、「こう歌ったから、こう聞える」のを計算した歌唱。こうした経験値はOBの強みだろう。

「イエノーリヤラウラヤット」

「広域指定合唱団青山組」

この2団体の選曲は Ave Maria。大変美しい曲で個人的にも大好きな曲だがこのコンテストには不向きか。この曲こそ大編成合唱向きだと思う。ドッペルコーラスで7声部あるから、メンバーの技量が相当に卓越していないと聞える音と聞えない音が出てしまう。また、両団体とも3番まで歌唱したが緊張感を持続させるのは困難だ。前者は終始安全運転に徹した演奏でありながら大人数並みのテンポ設定。後者はピアノ

シモで音楽が横に流れない。Sacta Mariaからの高揚感が途切れ途切れにならなってしまう。しかしそんな状況下でも一定水準は保っているのは凄い。



<駿河台倶楽部>



<駿河台倶楽部B>

「杉並学院OB合唱団」

木下牧子の男声合唱曲を2曲選曲。出だしで「元気が無い」と思わせたが、次第に改善。メンバーが山台を使用し半円形に並んでいながら、全員が客席の方に向かって歌っている。特に最前列(左端トップと右端ベース)の二人が指揮者無しにかかわらず、ブレスやフレージングがピタッと合っている。横に目がついているような上手さで感心した。

「Be-ieve Equipe」

14名で颯爽とステージに登場。タートルネックのセーターの上にネックレス、黒のジャケットで統一。

「一曲目は信長さんの「ノスタルジア」から滝廉太郎の「花」。上手い。余裕があるし、自信たっぷりだ。2曲目はガラリ変わって Spirituals。繰り返しが多いため間延びしそうになる。山本政隆君の巧みなりトドでクリア。コンテストでは制限時間内で全く違う性格の曲を演奏するのは有効かもしれない。

「駿河台倶楽部B」

「草野心平の詩から」より「金魚」と「さくら散る」を11名で歌唱。「金魚」は少人数ながら透明感のある音楽を披露。テナーは上手にカンブレを繋いで音程をキープ。全体的に緊張感を持続できていた。そして「さくら散る」。音楽は上手に流れ16分音符も良く揃っていた。惜しいのは meno mosso。東洋の時間。このフレージング。この四度はこの曲のキモなので決めて欲しかった。結局最後まで音楽が破綻せず終わった。聴き終えて掌を見つめて汗ばんでいた。他人事に思えず客観的な評価はとて出来ない。

「創価学会しなの合唱団」

「わがふるさとのうた」から「郷愁」と「鐘鳴りぬ」。古きよき時代の男声合唱を勢揃いさせよう。演奏スタイル。恰幅良く堂々としていてスケールが大きい。お揃いの白のブレザーからして、何だかこちらの方が明グリーではと錯覚しそうになる。テンプ設定や弱音の使い方など、荒削りで煮詰めるところはたくさんあるが、こういった演奏をする団体が他にない。際立った形となった。

全体を聴いて感じたのは、技術的に上手い団体でもメッセージ性が伝わらないことがあること。もっとハートに訴えてくる演奏が聴きたいと思う。その点、他を大きく引き離している団体があるように思えます。我々にもチャンスがまだあることを再確認できたコンテストだった。

# 平成23年度を迎えて

明治大学グリークラブOB会 会長 齊藤健治

最初に、今回の東北大地震で被害に遭われた方々に、心からお見舞い申し上げます。二日も早い復興をお祈りいたします。幸いな事に、グリークラブの現役・OB本人に直接接にかかわる被害は有りませんでした。ただ、今後発問問題の進行によつては、福島在住のOBに避難等の影響が出る可能性があります。

4月23日に行われたOB総会により、平成22年度及び平成23年度に関する議案が承認されました。昨年は11月にグリークラブ創設50周年を大勢のOBにより、盛大にお祝いすることが出来ました。今年度は、現役支援の強化・明立交換演奏会50回記念行事(6月18日・京都・ホームページ)の刷新を中心にOB会の行事を進めてまいります。OB諸兄の積極的な参加をお願いいたします。

今年度は5月の連休中に2つの六連(訳あって混声六連も)を聴きました。六連自体は良くも悪しくも各校の個性が出すぎるくらいに出ている、六大学合唱連盟と言うには、まとまりに欠ける演奏会だった気がします。オンステは、明治23名、慶応32名、法政6名、東大17名、立教36名、早稲田82名、合計196名になります。プログラムに掲載の名簿は各校ともにもう少し多いのですが、就活等思い通りにならないのでしようか。ただ各校ともに大事なエールが上手くないのが気になったのと、4時間の演奏時間は長いと感じました。

対する混六です。昭和34年に六連はグリークラブの参加(この前年まで明治は混声)になったため、同年に東京六大学混声合唱連盟が発足し、今年で53回目の定演になります。立教の代わりに、青学が参加しています。オンステですが、東大77名、青学38名、早稲田71名、法政66名、慶応40名、明治74名(女性43・男性31)、合計376名です。六連のほぼ倍の人数になります。明治は混声の男性のほうがグリーよりも多い状況です。入場料は全席自由で1000円、プログラム無料配布、なおかつ表紙だけでなく内部までカラー印刷です。演奏の上手下手は別として、六連よりも合唱の演奏会と言う感じがしました。齊藤が感じたエールをいくつか。1.エール交換は各校24名ですが、全員下手からの入場。2.山台があるにも関わらず全員ベタで歌唱。3.学指揮は団員の前ではなく、指揮する位置にボンボンと立っている。4.明治のエールはスタックカート(し。ら。く。も。な。び。く。)とレガート(す。ー。ー。が。い。だ。い。(ギョー))で、1.2番を歌いますが、2番のリフレインは、我々が健児の意気をは知るや。の後は。お。お。明治の名ぞ我らが母校。で、ギョギョーでした。5.合同演奏も全員下手からの入場で時間が長い。指揮者は、青学が榎本英二先生、慶応が栗山文昭先生、明治はOBが、その他は学指揮でした。ひいき目に見ても明混のベルカントな演奏は他校よりも良かったのが印象に残りました。